

愛する・感じる・嫉妬する - 「漢語 + する」について

中村雅之

1. 問題点

日本語の中には漢語の語彙に「す / する」を付けた動詞が数多く存在するが、それらの動詞は形態上いくつかの型に分かれる。

型「漢字一字 + する」 愛する(愛さない[未然]・愛せ[命令])

型「漢字一字 + じる」 感じる(感じない[未然]・感じろ[命令])

型「漢字二字 + する」 嫉妬する(嫉妬しない[未然]・嫉妬しろ[命令])

伝統的な国語文法の用語によるならば、型はほぼ五段活用、型は上一段活用、型はサ行変格活用である。語源的には全て「漢語 + する」なのであるから、それらの活用は「する」に準じてサ行変格活用になることが期待されるが、実際には上のおりである。そこで、なぜこのような状況が生じたのかを考えてみたい。

2. 音声・音調上の要因

まず、上述の三つの型の分岐が原則的には音声・音調上の要因によることについて確認しておく。

型の「～じる」は、古くは「～ず」であったものが、「～ずる」を経て「～じる」になったものとされている。「～ず」が「～ず」と濁るのは、漢字の中国語原音が[-n][- ]などの鼻音韻尾を有する場合である。(この「中国語原音」がいつの時代のどの地域のものかということは以下の議論にほとんど影響しないので立ち入らない)「感じる」の外に、「演じる」「信じる」「生じる」「乗じる」「興じる」など、現代中国語の知識のみをもってしても、これらが鼻音韻尾を持っていることは明白である。ただし、「存する」「損する」のように鼻音韻尾の後で濁らない発音をする例外もある(ただし「存ずる」「損ずる」の発音もあり)。また、「御覧じる(ごらんず > ごらうずる > ごろうじる)」のように漢字二字の後で「～じる」となる例も稀にあるが、これは「ご」が接頭辞と見なされた結果であろう。

一方、型では「共感する」「出演する」「確信する」「発生する」のように、鼻音韻尾の後でも「～する」は濁らない。これは音調上の理由によると思われる。東日本の発音では、「中学校」における「学」は通常[- ak(ko:)]といわゆる鼻濁

音になるが、「高等学校」においては[-gak(ko:)]となることが多い。これは漢字二字のまとまりが音調の面で落ち着きがよいため、次の語は(あたかも語頭にあるかのように)鼻濁音化しないのだと説明できる。同様に、漢字二字の後の「する」も単独の「する」と同じように発音され、連濁を蒙らないのである。

### 3. 和語への類推 - - 「愛する」の場合

「嫉妬する」などの 型が単独の「する」と同様の活用をすることから、「～せず / ～しない[未然]」「～せよ / ～しろ[命令]」というサ行変格活用が「漢語 + する」の最も古い型と見なして差し支えないであろう。したがって、「愛する」の型と「感じる」の 型は後に生まれた型ということになる。その変化の理由は和語への類推にあったと考えられる。

型の場合と異なり、「漢字一字 + す」の形式すなわち「愛す」「訳す」「画す」などは音節数が短く、漢語を基にしているという意識が薄れやすかった。そのため「さがす(探)」「かくす(隠)」「ためす(試)」などの「～す」という和語の動詞への類推が働いて、四段活用(現代語の五段活用)に変化したものと考えられる。

かくす - - かくさず[未然] - - かくせ[命令]

という活用が「隠す」という和語のみならず「画す」という漢語由来の語にも適用されるのはさほど不自然なことではない。

型の例外をなすものに、「達す(る)」「察す(る)」「欲す(る)」など「～っす」の形式を持つものがある。これらの未然形は古語では「～せ(ず)」、現代語では「～し(ない)」であって 型と同様である。つまり他の 型のように和語への類推は働かなかった。おそらく和語に「～っす」のような促音をともなった動詞が存在しなかつたため、古来の型にとどまったのであろう。

なお、「要する」「適する」などについて、「要しない」「適しない」のような表現が(とりわけ官公庁の文書において)見られることがある。口語では「要さない」「適さない」が一般的であるから、これは一種の擬古体ということになる。

### 4. 和語への類推 - - 「感じる」の場合

型が和語への類推から生まれたのと同様に、 型も和語の動詞の型に倣ったものと考えられる。

和語に、「先んじる」「軽んじる」「疎んじる」など「～じる」の形式を持つ動詞がある。これらは古語では「さきんず」「かるんず」「うとんず」であるが、さらにその

前段階は「さきにす」「かろみす」「うとみす」であった。つまり、

sakinisu > sakinsu > sakinzu

karomisu > karomsu > karonzu

のように、「～す」の前の母音「i」が脱落したことにより、「n」や「m」といった鼻音子音からの前進同化によって「す」が有声化したものである。そこで文語形「さきんず」「かろんず」「うとんず」などが生まれたのであるが、口語においては、母音「i」が消える際に、その代償として(やはり前進同化によって)「～ずる」が「～じる」に変化した。つまり、「～する」から「～ずる」への有声化と、「～ずる」から「～じる」への舌面音化がほぼ同時に起こり、「さきんじる」「かろんじる」「うとんじる」などの語形が生まれたと考えられる。

このような和語の「～ずる(文語):～じる(口語)」への類推が働き、漢語由来の「感ずる」「信ずる」なども「感じる」「信じる」という口語の語形を獲得したものと推測される。口語の「感じる」「信じる」が上一段活用であるのは、和語の「先んじる」「軽んじる」などと同様である。

以上をまとめれば、「漢語+する」は、「ドキドキする」や「キャッチする」などと同様にサ行変格活用をする動詞であったが、音節数の比較的少ない 型や 型においては和語の動詞(ためす・かくす・さきんじる・かろんじるetc.)への類推が働いて、それらと同じ活用(五段活用または上一段活用)をするようになった。つまり、 型や 型は漢語が和語に組み込まれた結果を反映していると言えるのである。